〔東京家政大学研究紀要　第24集(1), p. 81～89, 1984〕

英国における絵本の歴史（2）

高橋　裕子

（昭和58年9月30日受理）

A History of Picture Books in England (2)

Yūko Takahashi

(Received September 30, 1983)

はじめに

絵本の製作過程において基本的に重要な役割を果たすのは，作家（ストーリー製作者）と画家そしてまとめて1冊の本に仕上げる編集者の3者である．文にかかわる作家と絵にかかわる画家，その2者をうまく結合させ，特有の絵本の世界を創り出す上で編集者の存在は大きい．

17c から 18c にかけてのイギリスでは，出版業が急速に成長して来たが，まだ，編集・印刷・出版の仕事は，分業化されておらず，個人で行なわれる場合がほとんどであった．前回に論じた Caxton や Newbery は，子どもの本の歴史上，欠く事の出来ない出版人であった．Newbery は，古い時代の子ども観を内包しながらも，子どもの存在を意識し，彼らの興味を引き出すための努力を払ったことで児童文学の父と呼ばれている．

彼の死後，その出版会社は2つに分かれて引き継がれたが，後継者達は両者共に彼の精神をも引き継ぎ，子ども達を対象とする本を，精力的に製作し続けていた．本稿で述べようとする Thomas Bewick と William Roscoe も彼らに負うところが大きい．Bewick の≪Select Fables of Aesop and Others≫は，“Bible and Sun”をそのまま引き継いだ息子の Francis Newbery によって出版されているし，Roscoe の≪The Butterfly's Ball≫は，新たに出版社を設立した甥の Francis Newbery（息子と同名である）を継いだ John Harris によって出版されたのである．

本稿で扱われるのは，この Newbery の後継者達の活躍した 18c 後半～19c 前半のイギリスにおける絵本の状況である．この時代には，絵本とはいってもまだ「絵」が挿絵の域に届まり，「文」に対する従属的な役割しか与えられておらず，この意味では「絵本前史」と呼ぶべき時代といえる．

しかしながら，この「前史」は，明確には意識されていなかったにもかかわらず，後の時代の絵と文が有機的に結びついた新しい絵本につながる着実な過程として重要である．

今回は，絵本が1つのジャンルとして成立する 20c の絵本へ至る道筋上にあって，見逃す事の出来ない重要人物である Thomas Bewick (1753—1828) と William Roscoe (1753—1831) をとりあげて，人物と作品を紹介する．

この2人は，同時代に生きながら，その属する階級，出版へのかかわり，製作態度など，両極端に位置していることは興味深い．

I. 時代背景（18c 後半～19c 前半）

17c 後半に起った産業革命以後，印刷技術は急速に進歩し，印刷出版業が事業として成立し，社会的にも重要な部分を占めるようになった．しかし，出版業者の名が本の扉に銘記されていることが多々あるのに比べて，彫刻師や挿絵画家が記入されている例は，きわめてまれであった．まだ，彫刻師や挿絵画家は職人であって，1人の芸術家としては認められていなかった．それは，印刷技術が，下絵を描くという芸術的な仕事を充分にカバーできるほど進んでいなかったからである．

印刷の方法は，従来の木版印刷に変わって，最も一般的な手段として，銅版印刷が盛んになっていたが，さらに鋼版印刷も新技法として導入されつつあった．

このような印刷出版状況の中で，子どもの本において

児童文化研究室

は，その価格を低くおさえることが第1義に重要とされたため，相変わらず木版印刷が中心であった．粗悪な紙に擦減った版木を使用して，その質を著るしく引き下げ，挿絵や文字を判読しにくいものにしていた．また，彫刻師の技術は，未熟であったのに加えて，下絵を描く芸術家の方も，彫刻師の技術を考慮して描くという事もしなかった．それは，子どもの本にとっての挿絵の重要性の認識に欠けていたためで，絵を入れることが読者の興味を引くという認識はあっても内容の理解を助けたり，イメージを広げたりする効果については，ほとんど考慮されていなかった．P. Muir は，その背景として「楽しみのために本を読むことは，他のすべての楽しみと同様に罪深いものとする昔からの考え方がある」[1]と述べている．

このような挿絵に対する考え方が根底にあって，作品には，適当ではない全く異る他の本の挿絵を借りたり，盗んだり，あるいは真似たりして利用することが盛んに行なわれていた．同じ絵が，違う出版社の違う物語に使われることは珍しいことではなかったのである．こういった状況を H. Darton は，次のように言っている．「George も，Gay も，Bevis も，そして巨人や死人 Christians，豚，竜，バイオリン弾き（いずれも昔話の主要な登場人物である）などもみな同じような姿をしており，歴史的に正確であるとか，文章の細部に対して忠実であるとかは問題とされなかった」[2]．

子どもの本の挿絵が，このような状況にあった中で，木版師 Thomas Bewick の果した役割は，後に述べるように重要であった．

一方，この時代の児童観についても一言ふれなければならない．18 c～19 c にかけては，イギリスの John Locke (1632—1704) や，フランスの Jean Jacques Rousseu (1712—1778) が主張した，子もどを1人の人格としてとらえる視点や，教育的な面で，その興味性の上に立った配慮が必要であるとする考え方が浸透してきた．しかしこれに清教徒的感情とイギリス人の合理主義的要素が加わった結果，押しつけがましい宗教教育やしつけをテーマとした長編小説が続々と生まれることとなり，真の子もどの立場に立った本はほとんど現れなかった[3]．

18 c～19 c に続出した一連の教訓派の作家，作品をあげるなら，Tomas Day (1748～1789) の《The History of Sandford and Merton》(1783—1789) の3部作や，Maria Edgeworth (1767—1849) の《Purple Jar》が有名であるし，また日曜学校運動の推進者であった Anna Lastitia Barbauld (1743—1835)，Hannah More (1745—1833)，Mrs. Sarah Trimmer (1741—1810)，Mrs. Sherwood (1775—1851) 等の人々による教訓物語があった．

このような状況の中で，子ども達は，やはり以前と同様に，昔話の中に物語の喜びと楽しみを見出さざるを得なかった．三宅は，「教訓派の作家全体について言えることは，昔話や想像力による作品を蔑視し全く否定していることで，それらがかろうじて娯楽に徹した教養の低い書き手によって，Chapbook の中で守られていたことは皮肉なことである」[4]と述べている．

そして，教訓的な物語と粗雑な Chapbook しかなかった当時の子ども達は，William Roscoe が息子に向かって，ふと口にした，口調の良い詩を，喜びを持って迎え入れることになった．

Bewick と Roscoe は，全く異る人生を歩みながら，同時代に，子どもの本の歴史に傑出した位置を与えられている．

II. Thomas Bewick (1753—1828)

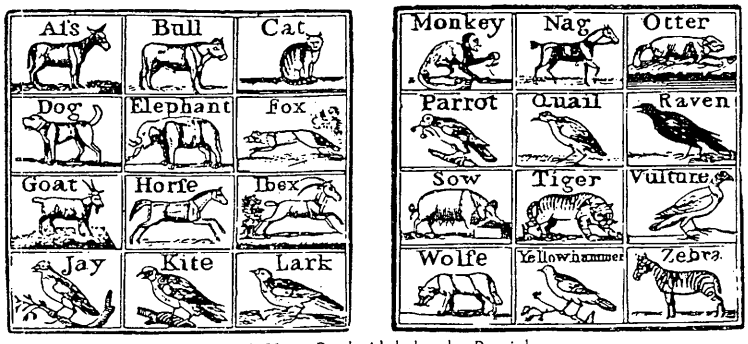
a. 生涯と作品

Bewick は，1753年に，イギリス北東部の Northumberland のタイン川流域の町 Newcastle にほど近い Cherryburn という土地で生まれた．炭坑の所有者の息子として生まれ幼い頃から絵に才能を示し，チョークで至る所に描いて遊んでいたが，親や教師には余り歓迎されず，隠れて描いたりしていた．後の Bewick の木版の図柄の中に，この幼少時代を過ごした Cherryburn の自然が大きく影響を与えている．

1767年，14才の時，Newcastle の彫刻師 Ralph Beilby の徒弟になり，すぐさまその能力を示して，1770年には，もうすでに，一人前の仕事を任された．この徒弟時代に，彼は従来の木版印刷の技術上の欠点を克服するために，版木の改良や新技法を考案してその能力を示した．

Beilby という人物は，1770年代の初期には，Newcastle にある Angus という Chapbook の活字の製作を専門にしていた Northumberland の印刷業者の一団で，その地の校長 T. Hastie から年少の子ども向けの読み方の指導書の製作を依頼された．

Beilby は Angus から挿絵の仕事を時々引き受けており，この Hastie の指導書の挿絵は徒弟の Bewick に任された．Bewick は，アルファベットの24文字を，それぞれ頭文字に持つ動物や鳥を1インチ四方の枡目に並べ



76 A Horn-Book Alphabet by Bewick

図　1

FABLE XLVII.

The Fox and the Stork.

図　2

て木版を彫った．この本のタイトルは，《The Only Method to Make Reading Eary》（図１）と言い，1839年には，その73版を記録するほど人気があった．P. Muir は，「これは，今やよく知られた様式の挿絵入りアルファベットとして最初のものではなかったかもしれないが，確かにそれらの中で，最も魅力的で成功したものの１つであった」[5]と述べている．

以上のように，Bewick の木版師としての仕事において，その初期の時代から子どもの本と深いかかわりがあったということは興味深い．

Bewick の最も有名な仕事の１つに《Select Fables of Aesop and Others》（図２）の挿絵がある．1774年に出版された．この本は，Newbery の後継者の１人である，Francis Newbery によって出版されたが，実際それが彫られたのは，徒弟になってすぐの1767年か1768年頃のことで，T. Saint 社から発行したものとされている．この本の中で Bewick は，戸外の自然に対する芸術家としての知識や愛を充分表現している．そして，作者は不明であるが，文章も，表現は簡潔な中に，充分大意が組み込まれ，そのすぐれた絵につり合って，たいへん出来のよい本であった．そしてロンドンの Newbery は，即座にその本の出版を決意したのである．そして又，本来は大人のものとして計画されたものであったらしいが，他の本や Chapbook と同様に子ども達は，自分達の所有物にしてしまった．

その後，Bewick は，数年の間，ロンドンに出たりもしたが，1777年には，再び Newcastle にもどり，Beilby の会社でパートナーとして迎えられた．その20数年後，19ｃの初めには，その会社を引き継いで経営者となり，弟の John と共に1828年に死ぬまでそこで仕事をした．

Bewick は，Aesop 以外の物語，たとえば昔話の《Guy's Fables》や童謡《Mother Goos' Nursery》Berquin の《Looking Glass for the Mind (1792)》などの挿絵も彫ったが，動物や鳥達の姿の絵に，その才能が，はっきり表われている．

1771年の《The New Lottery Book of Birds and Beasts for Children to Learn their Letters by as soon as they can Speach》から，その死によって未完成のままになってしまった《History of British Fishes》に至る一連の本に描かれている生き物達の姿は，Bewick の高い木版技術や芸術家としての能力を示す一方で，自然に対する深い知識や関心の存在，そして愛情がその根底に流れていることを示している（図３）．その中でも，集大成と言われるものに《A Natural History of British Birds, (Land Birds) (1797)》《A Natural History of

図　3

British Birds, (Water Birds) (1804)》《History of British Fishes.》の3冊がある.

b.　作品一覧

1770年　A New Invented Horn Book.

1771年　The New Lottery Book of Birds and Beats for Children to Learn their Letters by as soon as they can Speach.

1772年　The Child's Tutor : or Entertaining Preceptor.

1774年　Select Fables of Aesop and Others.

1777年　A New Years Gift for Little Masters and Misses.

1778年　The Mirror ; or, a Looking-Glass for Young People.

1779年　A Pretty Book of Pictures for Little Masters and Misses or Tommy Trip's History of Beasts and Birds.

1779年　Guy's Fables.

1781年　Moral Lectures.

1784年　Aesop's Fables.

1784年　Select Fables.

1789年　The Life and Adventures of a Fly.

1790年　A General History of Quadrupeds.

1792年　Looking Glass for the Mind.

1797年　A Natural History of British Birds, (Land Birds).

1804年　A Natural History of British Birds, (Water Birds).

(木完成) History of British Fishes.

上記の作品は，子どもの本のための Bewick の挿絵のほんの一部であって，他にも明らかに Bewick の作品であると考えられるものが数多く残されている．しかし，同じ版木があちこちで使用されたり，画家や作者が明示してある本が皆無に等しい出版業の勃興期にあって，明確にするのはきわめて困難である．

c.　果した役割

Bewick が，才能ある木版師として，すぐれた芸術作品を残したという事について，次の2点については特に評価の高い事柄である．

第1に，子どもの本の挿絵画家として，最初に名を残した人物であった事である．当時，挿絵を彫る仕事は，無名の彫刻師や画家によってなされていたが，Bewick は，そのすぐれた技術と高い芸術性において，その名声が，他の同業者の比ではなかったので，購売者のために，表紙に名前を印された最初の挿絵画家になった．これは，子もどの本の挿絵画家の地位を安定させ，職業として成立させる第1歩となった．M. Hill は，「すぐれた芸術家が，子どもの本のために挿絵を描いたということが，Bewick の貢献として興味深い点である」[6] と近べている．

第2には，従来の木版印刷を発展させた点である．今までのものより，よい用具を改良したり，また板を重直にカットして木目板を使用し，版木の種類も堅いツゲを利用することを思いつくなどで，印刷の強い圧力に耐える方法を考案した．この方法によって，版木は従来のものより，はるかに摩滅に耐えるようになったのである．技術上では，"White line" という新技法を考え出し，黒地に白いラインを使用し，その長さや幅を増減することで，絵に立体感を出すことに成功した．その結果「低迷していた木版画が，再び一般的なものになったことは，彼の成功によるものである」[7] (B. Doyle) とされている．

III.　William Roscoe (1753—1831)

a.　その生涯と作品

Roscoe は，1753年，菜園主の息子として生まれている．非常に博学な人物で，弁護士，銀行家，植物学者，歴史家，詩人，作家，本の収集家，美術の鋳識家，と数多くの事柄に手を染めていた．イタリヤについてもくわしい学者で，ロレンツォ・ディ・メディチの伝記を書いた．また，国会議員でもあり，Liverpool の名士であった．奴隷売買の反対運動にも参加したりした．

Roscoe は3人の娘と7人の息子がいたが，1906年の秋に，末息子の Robert の6才の誕生日を祝うために，ふとした思いつきで一遍の詩を創った．

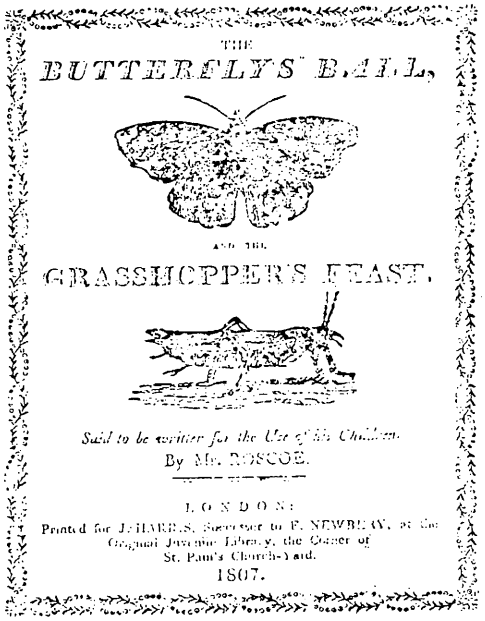
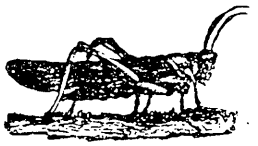

THE
BUTTERFLY'S BALL,
AND THE
GRASSHOPPER'S FEAST.
Said to be written for the Use of his Children.
By Mr. ROSCOE.
LONDON:
Printed for J. HARRIS, Successor to E. NEWBERY, at the Original Juvenile Library, the Corner of St. Paul's Church-Yard.
1807.

図　4

その詩は，1906年のロンドンの雑誌“Gentlemen's Magazine の11月号に“1806年11月号のための選抜きの現代詩”という見出しで掲載された．その題は《The Butterfly's Ball, and Grasshopper's Feast, said to have been written by William Roscoe, Esq., M. P., for Liverpool, for the use of his children, and set to music by order of their majesties, for the Princess Mary—ちょうちょうの舞踏会とバッタの祭り，リバプールの国会議員，ウィリアム，ロスコー氏によって息子のために書かれ，プリンセスメアリーのために両陛下の命による節付けをして—》(図４）という長いものであった．当時の国王は，余り人気のなかった George Ⅲ で，王女の Mary は，1806年にはすでに30才になっており，このような子どもの詩を喜ぶ年令であったとは考えにくい．その上 Gentlemen's Magazine は，かなり堅い雑誌で，子どものための詩を真正面に載せるとは思われない事も考え合わせると，イギリス人特有のユーモアで，国王を揶揄しようとしたとも考えられる．しかし，国王は，当時の有名なバイオリンの名演奏家で，指揮者で作曲家でもあった Sir George Smart にこの詩で作曲させた．その合唱曲は，Sir George の音楽の生徒達であった３人の王女達 (Elizabeth, Augusta, Mary) に奉げられ，演奏もされた．

Gentlemen's Magazine に載ったこの詩は John Newbery の会社を1802年に継いだ John Harris の目に止まった．Harris 当時は，教訓物語とは全く違った楽しい本《Old Mother Hubbard and Her Dog.》を出版して成功しており，すぐその詩が子ども達に喜んで迎えられることを直観した．



THE
BUTTERFLY'S BALL
AND
Grasshopper's Feast.

図　5

《The Butterfly's Ball》は 5/3インチ×3/4インチの小型本で，1807年１月１日の日付で出版された．この本は，才能ある画家 William Mulready (1786—1863) の筆による14枚の銅版刷りの挿絵が入っている．Mulready は，貧しいアイルランド移民の子どもで，若い時代からその才能を認められ，15才にはもう挿絵で生活をしていた．29才でロイヤルアカデミーの会員に抜擢されるほどだった．

この本は，色刷りではなかったが，６色の手彩色をされたものもあって，１シリングで売られ，１年間で２万部を売った．そのため，この銅版は，年末になるまでに擦り減ってしまい，タイプ版を新たに出版しなければならないほどだった．新しい版での出版は，1807年内に行なわれ，詩を Roscoe 氏の作と明記してあり《An Original Poem entitled A Winter's Day by Mr. Smith of Stand》という詩が付け加えられていた．また挿絵は，７枚の銅版画で，改めて描かれたが，最初のものよりはるかに魅力に乏しいものであった．この1707年タイプ印刷版は，現在ではほとんど残っておらず，《Tuer's Forgotten Children's Books London : (1898—1899)》で見られるだけである[8](図５)．そしてタイプ印刷版の方も，1808年の始めには同じ挿絵と文字とで，しかし付け加えられた Smith 氏の詩は除かれて，再版された．

Roscoe 氏は，この大成功を喜んだらしく，再びちょうちょうを主人公にして５枚の銅版印刷の挿絵の入った

《The Butterfly's Birthday》を1809年に書き，これも成功している．

1808年に，ロンドンの Wallis（Harris の同業者）は，《The Butterfly's Funeral—ちょうちょうの葬式》を出版して，この人気に水をさそうとしたが，逆に売れ行きを増すのに手を貸すことになってしまった．

《The Butterfly's Ball》は，1816年に再び Harris 社から再発行され，1860年になってからは，Carvalho, Dern, Munday, Thomas Richardson, Marks, など多くの出版社から出版され続けていることを考えると，50年以上に渡って子どもの本として君臨し続けたことを示している．

1855年には，ロンドンの王立劇場のクリスマスのための出し物に使われて，大あたりをとったこともあり，また，初版から120年後の1638年には，出版社 Hayward Marks（ロンドン）が Rhyllis Riley の美しい挿絵で新たに発行されてもいる．

イギリス国民の心の中には，Mother Goose の詩と同レベルでの存在感を持っているのではなかろうか．

Harris は，この大成功を続けようと，続々と同パターンでシリーズを出版し続けたが，他の出版社もこれに目を付けないはずはなく，海賊版・模倣書は，限りなく現れた．その一部を後述する．

b. 続出した模倣作品

先頭をきった本に《The Peacock "At Home", A Sequel to The Butterfly's Ball》（図6）がある．題にあるように前作の続編として Harris 出版から1807年9月1日に出版され，Written by a Lady（1婦人による），と記されてあった．後になってこの婦人は，Mrs. Dorset (C. Ann. Turner. 1750?—1817?) であることが判明した．やはり，Mulready の6枚の美しい銅版刷りの絵が入っており，手彩色の当時としては豪華な本であった．しかし，物語の内容は，ちょうちょうが舞踏会を開いたのなら自分達もと鳥達が集まって豪盛なセントヴァレンタインディーの祝宴を開いたという第1作の完全な焼直しで，第1作にあったような生態をもじった描写も見あたらない．ただ韻の正確な，優美で陽気な詩と美しい挿絵は，前作よりすぐれていると評した人もいる．しかし，《The Peacock at Home》には，詩も挿絵も完全に整っているという完成美はあるが，子どもを引きつける躍動的な魅力に乏しい．Mrs. Dorset は，教育的な意味のない詩であったことを後悔したらしく，1809年のものには，科学的な注を20ページと Mrs. Smith (Mrs. Dorset の

図　6

姉）による博物学的な詩も書き添えたという後日談がある．

《The Butterfly's Ball》と《The Peacock "At Home"》を合わせて，1807年の1年間の間に4万部売り，以後30年に渡って出版し続けた．

Harris は，引き続き，類似本をシリーズに発行した．シリーズ第10巻の《The Lion's Masquerade》(Mrs. Dorset. 1807)，第15巻目の《The Elephant's Ball, and the Grand Fate Champeter》(W. B. 1807) の2作に前作を加えて，後日4部作で出版されたのが有名である．後述のリストにあるように，獣，魚，人魚，植物，などのあらゆる生物が登場し，パーティ，（仮面）舞踏会，朝食会，祭，旅行，議会，などに行って楽しんで帰るという同パターンの挿絵本が出版され続けた．

1807　Mrs. Dorset, The Peacock At Home.
1807　Mrs. Dorset, The Lion's Masquerade.
1807　W. B, The Elephant's Ball.
1807　Mrs. Dorset, The Eagle's Ball.
1808　J. L. B, The Butterfly's Funeral.
1808　Mrs. Dorset, The Water-King's Levee.
1808　Anon, The Jackdow at Home.
1808　The Ape's Concert. (by A. Tabby)
1808　The Lioness's Rout. (Edward lists)
1808　The Lion's, Parliament and The Lioness's Ball.
1808　The Fishes', Feast.
1808　Mrs. Cockle, The Fishs' Grand Gala.

1808 Anon, The Mermaid at Home.
1808 The Feast of the Fishes. (By J. Harrs)
1808 Anon, The Lobster's Voyage to the Brazils.
1808 Anon, The Council of Dogs.
1808 Anon, The Horses' Levee.
1808 Flora's Feast.
1808 Tom. Tit, The Eagle's Masqwe.
1808 Anon, The Roses' Breakfast.
1808 Anon, Floras' Gala.
1808 Ann. Taylor, The Wedding among the Flowers.
1808 W. R, The Butterfly's Birthday.
1808 Anon, The Court of the Beasts.
1809 Mrs. Reeve, The Flowers at Court.
1810 Anon, The Turtle Dove's Wedding.
1810 Mrs. B. Hoole, Le Fête de la Rose.
1810 Anon, Pomonas' Frolic.
1812？ The Peacock Abroad. (by Harvey and Darton)
1816 The Peacock and the Parrot. (by J. Harris)
1818 The Festival of Flora.
1820 R. C. Bartor, The Butterfly's Gala.
1823 The Monkey's Frolic. (by J. Harris)
1840 The Peahen at Home or the Swans' Bridal Gay.
1860？ Flora and Pomonas' Fete.
1875 Lion's Reception.
(No date) The Tyger's Theatre. (by S. J. Arnold)
(No date) Lady Grimalkin's Concert and Supper and The Cat's Tea Party.
(No date) The Lion's Parliament.

c. 《The Butterfly's Ball》の果たした役割

Come take up your Hats, and away let us haste,
To the Butterfly's Ball, and the Grass hopper's
（さあみんな，帽子をかぶって急ごうじゃないか
ちょうちょうの無踏会とバッタの宴会へ）
The Trumpeter Gad-Fly has summond' the crew,
And the Revels are now only waiting for you.
（ラッパ吹きのアブが仲間を集めた
さあ，これから始まるぞ，飲めや歌えのどんちゃん騒ぎ）[9]

という始まりで，32行の詩である．内容は，カブト虫，アリ，ブヨ，トンボ，ガ，スズメバチ，ジガバチ，ヤマネ，モグラ，でんでん虫，ミツバチ，カタツムリ，ツチボタル，が順々に集まって，樫の木の下の草むらで，キノコのテーブルにすいばの葉っぱのテーブルクロスをかけて，夕食会とダンスの会を開き，夕方になってまた帰って行くという，くり返しの多い，筋としては，単純な構成の話である．

詩としては，haste と feast, wood と flood, spread と made のように言葉が持ち入られており，韻がきちんとふまれていないので，けして出来のよい詩とは言えない．しかし，32行という詩の全体の長さは，幼い子ども達に適切で，1行ごとの句も口でとなえやすいリズムを持っていた．

内容についても，登場する生き物達は，ミツバチが運んだ蜜のごちそうがあったり，ダンスを踊ったのろのろのカタツムリがはずかしがって小さな殻に引きこもってしまったり，ツチボタルがカンテラをかかげた夜警になったりと，それぞれの生態が生かされて表現してあり，子ども達の興味を引きつける道具建てとなっている．

Mulready の挿絵は，詩の持つ内容に，画家自身の想像した世界が加わり，独自の世界となっていて，彼の才能をうかがわせる．

生物達は2通りに表現されており，1つは蛾やスズメバチのように妖精の頭の上にその形を乗せているもの（図7）と，もう1つはアブやモグラのように生物の上に妖精が乗っているものである（図8）．その表現も，蛾は，羽を広げて飛ぶようにスカートを広げた女の子の妖精の上に乗っており，スズメバチやジガバチは，その腰に剣をつけるした人の頭上に止まっている．また，ラッパを吹いて仲間を集めている少年の下に描かれている

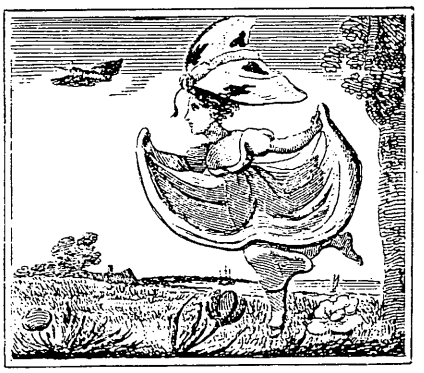


図 7

図　8

アブもやはラップをくわえていたり，ふとっちょのモグラに乗っている小人は，穴堀用のシャベルをかついでいたりしている．

その妖精達は，生き生きとした表情を持ち，はるか遠くに風車がのぞめる空の上を飛んでいたり，草村の間を歩いたりしながら，笑ったり，歌ったり，踊ったりしている．絵が，ただ単に詩の説明に届まっておらず，独得の世界が造り上げられていて，挿絵の段階から一歩前進した表現となっている．絵と文とが結合して，一つの世界を形成する，いわゆる絵本へ発展する朋芽を含んでいたと言えよう．

また，瀬田は，「小さい子ども達は，『行って帰る』という構造を持ったお話に一番満足を覚えるというのがぼくの仮説なんです。」[10]と主張している．この一見単純な「行って帰る」という行動は，幼児が成長する各段階で，常にその振幅や方向を違えながら，くり返しているパターンであって，まさに，この詩の中で，追体験するという喜びを持つのである．そして登場するのは，日常の生活の中で目にすることのできる，チョウやハチ，トンボなど，小さな昆虫達で，具体的な形やしぐさなどが，はっきり理解できる生物である．それがくり返して現れては集まって，食事をし，ダンスをし，遊んで夕方になって巣に帰って行くという子ども達の生活リズムとも合致している話は，今でも子ども達の人気の高い物語によく見られる形である．おそらく Roscoe 氏は，沢山の子ども達の仲間に入って遊ぶ事の多い，やさしいよき父親だったのではあるまいか．

現代でも，そのリズムや詩の構造は，子ども達を引きつけ得るものを持ち，挿絵においても，その躍動的で豊かな表現は，充分鑑賞に耐え得ると思われるのに，この人気が 20 c 末の現在，それほど高く評価され得ていないのはなぜであろうか．最大の理由は，子ども達自身がその詩の中に参加できない，という大きな欠点であろう．つまり，自己を投影する相手である主人公が明確でないために，視点が定まりにくいのである．ピーター・ラビットやおさるのジョージ，アンガスが参加していたら，結果は，もっと違ったものになっていたかもしれない．

しかし，当時の教条的な教訓主義の中にあった子ども達が，その文学的意味での貧しさの中で，明るい雰囲気の，ただ楽しいだけの物語に吸い寄せられたのは必然であった．

ま と め

本当の意味での絵本作家の出現は，20 c の Potter (1866—1943) を待たねばならないが，そこに到達するまでには，まだ長い時間と才能ある編集者が必要であった．John Newbery の後を継いだ Francis Newbery そして，John Harris へと少年少女向きの本を創る編集者の流れがあり，それは E. Evanse (1826—1905) の出現へとつながって行く．また 18 c 後半になると，その歴史に登場して来るのが挿絵画家や風刺画家であった．印刷出版技術の向上にともなって画家も芸術家としての能力を発揮することができるようになり，独立した職業として認められるようになったからである．Bewick Mulready そして，G. Cruikshank (1792—1878)，W. Blake (1757—1827) がこの時代の特筆すべき画家であった．その挿絵画家達も又，W. Crane (1845—1915)，R. Coldecott (1846—1886)，K. Greenaway (1846—1901) のような天才的な絵本画家を生む道筋上にいたのである．

ストーリー作家においては，ほんとうにその朋芽が表われたばかりあったが，本研究でとり上げた Roscoe や上記の Blake が詩を創り子ども達に喜ばれた．Roscoe は，身近な子どもを喜ばせることを目的として，それを書いたという点で Potter に一歩近ずいたと言える．

引用文献

1) Muir, Percy : English Children's Book 1600 to 1900, Bastford. 1954, p. 219

2) Darton, Harvey : Children's Books in England, Cambridge Univ. Press. 1970, p. 74

3) ポール・アザール：本子ども．大人，紀伊国屋書店，1957, pp. 48～49
4) 三宅興子：英米児童文学，中共出版，1977, p. 31
5) Muir, Percy : English Children's Book 1600 to 1900, Bastford. 1954, p. 220
6) Arbuthnot & May, Hill : Children and Books, Scott Foreman and Company. 1947, p. 53
7) Doyle, Brian : The Who's Who of Children's Leterature, Hugh Evelyn. 1968, p. 310
8) Stone, wilbur Macey : The Horn Book. VOL. XVIII, 1942 p. 50,
9) 石井桃子他：複刻世界の絵本館―オズボーンコレクション解説，ほるぷ出版，1981, p. 15
10) 瀬田貞二：幼い子の文学，中央公論社，1980, p. 7

参考文献

- Arbuthnot, May Hill and Others : Children and Books (Scott, Foreman and Company, London 1947 Forth edition)
- Arnold Arnold ; Pictures and Stories from Forgotten Children's Books. (Dover, New York, 1969)
- Bewick Thomas, : A New Years Gift. (ほるぷ出版, Japan, 1981)
- Darton, F. J. Harvey : Children's Books in England (Cambridge Univ. Press. London, 1970)
- Doyle, Brian : The Who's Who of Children's Leterature (Hugh Evelyn, London, 1968)
- Ellis, Alice : How to Find out about Children's Literature (Pergamon Press, Oxford, 1973 third edition)
- Meigs, Cornelia and Others : Critical History of Children's Literature (Macmillan, New York, 1953)
- Muir, Percy : English Children's Books 1600 to 1900 (Bastford, London, 1954)
- Roscoe, William : The Butterfly's Ball and the Grasshopper's Feast. (ほるぷ出版, Japan, 1981)
- Smith, James Steel : A Critical Approach to Children's Literature (McGraw-Hill, New York, 1967)
- Stone, Wilbur Macey : The Horn Book. (VOL. XVIII 1942) p. 44～p. 53.
- C. A. T. Dorset : Peacock "At Home" (ほるぷ出版, Japan, 1981)
- 高杉一郎：英米児童文学（中共出版，1977）
- 清水真砂子他編：英米児童文学史年表・釈訳年表（研究社，1972）
- ポール・アザール，矢崎源九郎他訳：本・子ども・大人（紀伊国屋書店，1957）
- 瀬田貞二：幼い子の文学（中央公論社，1980）
- 石井桃子他編：複刻世界の絵本館オズボーンコレクション解説（ほるぷ出版，1981）
- 三宅興子：児童文学世界 No. 5（中共出版，1982）